

共存と和解の行方

～ 紛争後のコソボで行き詰まる欧州主導の平和構築～

石井由希子

目次

はじめに

1. 紛争後のコソボにおける平和構築の枠組

1-1. 欧州の一部として

1-2. 多民族共存の社会をめざして

1-3. なまなましい憎悪が障害に

2. 現場からの視点

2-1. 憎みあう人々が対話を再開するまで

2-2. 行政面での統合と政治面での分離

2-3. 共同事業の失敗

おわりに

はじめに

コソボはユ・ゴスラビア連邦を構成するセルビア共和国内の一自治州である。スロボダン・ミロシェビッチ前政権によってコソボでは露骨なセルビア人優遇と非セルビア系民族弾圧の政策が約 10 年間続き、その「重大な人権侵害」に北大西洋条約機構 (North Atlantic Treaty Organization : NATO) が「人道的介入」と称する空爆を行ったのは 1999 年 3～6 月だった。紛争終結後、国連を中心としてコソボの平和構築にむけたプロセスが始まった。その約 1 年後の 2000 年 5 月末から 2001 年 6 月まで、筆者は国連コソボ暫定行政ミッション (United Nations Interim Administration mission in Kosovo : UNMIK) でロ・カル・コミュニティ・オフィサー (Local Community Officer) として少数派住民の保護を担当し、民族共存の環境整備に関わった。勤務地は、州都プリシュティナから約

50 キロ離れたスケンデライ・スルピツァ市である。本稿の目的は、その約 9 ヶ月間の活動記録をもとに現場の視点から、多民族社会建設にむけた努力がどんな障害に直面して挫折していったのか検証することである。

まず第一章では紛争後のコソボにおける平和構築の枠組を明らかにする。

冷戦後の紛争の変質や安全保障概念の変化に伴って国家を越えた地域主導のアプロ - チが重視されるようになった背景にふれ、欧州が積極的にコソボの平和構築に関与する戦略をたてたことを確認する。そして現地で民族間の断絶を痛感した国連首脳が、多民族共存の社会をめざして新たな政策を打ち出した経緯を整理する。さらにその政策を実施するにあたって筆者が直面した現場レベルでの困難と、歴史的な対立を経て現地住民がもつなまなましい憎悪の実態を描く。

第二章では民族共存のための環境作りについて、筆者が実際に関わった努力をいくつか取り上げてその成果を分析する。国連首脳が提示したプランが挫折した事情を、現場の視点から検証していきたい。

1. 紛争後のコソボにおける平和構築の枠組

国連コソボ暫定行政ミッション (United Nations Interim Administration mission in Kosovo : 以下 UNMIK) の初代特別代表 (Special Representative of Secretary General) ベルナ - ル・クシュネル (Bernard Kouchner) は、

「歴史の重荷はあるにしても、アルバニア人とセルビア人の和解は可能だと信じている。」(*"Child massacre uncovered in Kosovo"* BBC World News, 4July, 1999)

と 1999 年 7 月 2 日の任命の翌日に地元フランスのラジオ局に語った。おりしもコソボではアルバニア系とセルビア系の指導者が暴力停止を呼びかける初の共同声明を出していた¹。凄惨な民族紛争を経たコソボで平和構築・民主化・安定・自治の達成を任された UNMIK は、民族和解への道をこうして歩き始めたのである。だが半年後クシュネルはコソボの人々にこう演説した²。

「我々は必要とされてここにいるのであり、住民にまだ無理

共存と和解の行方～紛争後のコソボで行き詰まる欧州主導の平和構築～（石井）

なことを押しつけるためにいるのではない。だからこそ我々
はもはや和解ではなく共存のための第一歩について話すのだ。」

(*New Year's Address by SRSB Bernard Kouchner, 1 January, 2000*)

当面は和解より共存をめざすと宣言したのだ。これは現地の厳しい民族対立に直面した上での現実的な対応であるといえよう。だが和解から共存への政策シフトの背景とその政策の成果を調べると、コソボにおける欧州主導の平和構築に限界が見えてくる。

1 - 1 . 欧州の一部として

冷戦構造崩壊後に続発した地域紛争をみて、前国連事務総長ブトロス・ブトロス・ガリは冷戦後の「紛争の質的变化」を指摘した。異なるイデオロギ-を持つアメリカ合衆国とソ連が対立した冷戦時代、地域紛争は米ソ各々が率いる西側諸国と東側諸国とのあいだの代理戦争だった。『平和への課題：追補』(1995)³は、地域紛争が「宗教的及び民族的性格を帯びた国内型の紛争」へ変化して「例をみない暴力や残虐さ」を伴いだしたと憂慮している。

『世界難民白書 1997/1998：人道行動の課題』(1997)は1990年代の国際情勢を概観して、

「超大国が競い合う時代が終わり、国内での武力紛争が増えるにしたがい、国際社会は不安定な状況を引き起こす別の原因に目を向けるようになった。共同体内部の争いと社会的暴力、貧困と失業、組織犯罪とテロリズム、移住と大量人口移動などである。」

と、しばしば国家の枠を越える問題に国家の単独行動ではうまく対処できなくなってきたことを指摘している。「人間の安全保障」の概念が重視されるようになってきたのも

「人間一人ひとりの生存、生活、尊厳を直接に脅かす深刻かつ広範な問題を克服するためには、一国の政府が国の安全と繁栄を維持し、国民の生命、財産を守るという伝統的な『国家の安全保障』の考え方のみでは、対応す

ることが難しくなりつつある。」

(外務省、分野別外交政策「人間の安全保障」⁴⁾)

という認識がひろく共有されるようになったからだ。

そこで「世界が全般として多国間・国際的な協力に向かっていることを示す例」として「地域機構が規模と影響力を拡大している」⁵⁾事実が注目されるようになった。法的には国連憲章第八章地域的取極が地域レベルの紛争へのアプローチを規定している。実際コソボで展開中の国連コソボ暫定行政ミッションには、欧州が地域レベルで関与を強めている。

国連コソボ暫定行政ミッションは複合型 PKO(Peace Keeping Operations)⁶⁾の中でもかつてなく包括的で革新的な挑戦だ。国連安保理決議 1244 号⁷⁾によって行政・人道援助・人権・民主化・難民帰還・経済復興・司法・警察など実に幅広い任務を課され、紛争後のコソボで平和構築を担っている。

最高責任者の特別代表を次席代表が補佐、副代表 4 人が人道援助⁸⁾・文民行政・制度構築・経済再建を担う。だが制度構築を欧州安全保障協力機構 (Organization for Security and Cooperation in Europe) が、経済再建を欧州連合 (European Union:以下 EU) が担当し実質「国連と欧州地域機構の混成組織」⁹⁾だ。特別代表もフランス人、デンマーク人、ドイツ人と欧州出身が続く¹⁰⁾。背景には暗黙の了解 - 欧州の問題は欧州で解決する - がある。コソボは欧州なのだ。

欧州が長年のバルカン介入の歴史を踏まえ、紆余曲折を経てまとめた『EU のバルカン戦略(EU strategy in the Balkans)』(2001 年)でもその立場は明確だ。将来コソボを EU へ統合することも睨んだ「野心的なビジョン」と「長期的なアプローチ」さえ提示された。

「バルカン半島は欧州の一部である。我々は - かつても
そうだったように - 呉越同舟だ。我々の過去と未来は
共にかたく結ばれている。」(Chris Patten,“EU strategy
in the Balkans”,2001)

欧州はなぜかくもバルカン地域を重視するのか。ニコラウス・ヴァンデルパス EU 拡大総局総局長は「EU がコソボ紛争に介入した理由」について次のように語っている。

「地図でお分かりのように、EU 加盟国と加盟申請国の多くがコソボに非常に近い位置にあります。過去にもバルカン地域での政情不安は、欧州や世界の平和を揺るがしてきました。これを繰り返してはなりません。EU は、この地域の国々との関係を強化し、EU 加盟の将来的な展望を示すことで、平和と安定に貢献していかなくはなりません。却(略) 却コソボ紛争では、EU が米国に依存する構図が改めて浮き彫りにされました。EU は自ら問題を解決する能力を身につけねばなりません。アフリカ、ボスニア、中東その他の紛争地域での経験から、EU は財政上の負担の大きさに比べて、政治的な存在感や影響力は米国に及ばないことが明らかです。これは EU には、主体的な軍事力を含めた真の共通外交・安全保障政策が存在しなかったという単純な理由からです。コソボ紛争により、EU は議論ではなく行動の必要性に気づいたのです。」

（「欧州と世界の間接関係を変える『EU 拡大』」 *Europe 1999*, 8/9/10）

彼はここでコソボ紛争が欧州の紛争解決能力の未熟さを露呈し、EU 共通外交・安全保障政策に影響を与えたと認めている。そして過去の反省のもとで、新しい対バルカン政策の基本姿勢を示した。

『EU のバルカン戦略』の起草が始まった 1999 年 10 月、欧州共通外交安全保障の議論は「軍事防衛分野を中心とする欧州共通安全保障防衛政策(CESDP)へ」と¹¹論点が移っていた。主体的な欧州防衛「欧州安全防衛アイデンティティ（ESDI）の志向」¹²が本格化し、欧州が自らの危機管理・紛争解決能力を高めるプロセスが加速していたのだ。こうした文脈のなかでできあがった『EU のバルカン戦略』は、バルカン地域への個別的な対応策にとどまらず欧州が統合にむけて発展していくための壮大な戦略の一端といえるだろう。コソボは欧州の一部としてその戦略に組み入れられようとしているのだ。

その戦略の中で重要な役割を担う国連コソボ暫定行政ミッション（UNMIK）には決定的な弱点がある。めざすコソボの将来の形、即ち独立か連邦維持かが曖昧なのだ。安保理決議 1244 号はユ・ゴスラビア連邦の領土保全を明記しているためコソボの独立を前提とした暫定統治ができない。「UNMIK が、実現すべきコソボの将来像を示せないまま終了す

る」¹³懸念があるわけだ。多数派アルバニア人は独立を求め少数派セルビア人は連邦維持を望む。両者の間で政治的プロセスを促すのは UNMIK の任務だ。だがコソボの地位問題は Dayton 合意で無視され、ランブイエでは合意に失敗したほどの難題だった。UNMIK 最高責任者クシュネルは、このミッションの成功のためにコソボの将来と UNMIK の使命を明確にする必要を国連安保理に訴えている¹⁴。

「我々はすべてのコミュニティの将来についてもっと開けた議論を始める必要がある。」(“Questions hang over future of U.N.'s Kosovo mission”, *CNN*, 7March, 2000)

バルカンの地域としての平和と安定の枠組みは整ったが、コソボそのものの将来をどうすべきか - コソボがいかなる形で欧州に組みこまれていくのか - という根本的問題が曖昧なまま UNMIK は答えを自ら探すことになった。

1 - 2 . 多民族共存の社会をめざして

国連コソボ暫定行政ミッション (UNMIK) 最高責任者クシュネルは空爆停止から 1 ヶ月後の 1999 年 7 月 15 日コソボに入り、セルジオ・デメロ¹⁵とコソボ移行評議会 (Kosovo Transitional Council : 以下 KTC) の初会合を仕切ったのが初仕事になった。

KTC は UNMIK が現地住民の協力を確保し任務の円滑な遂行を図るため設置した政治的諮問機関だ。ただし決定権はない。KTC にはコソボのコミュニティの代表¹⁶が集まったが意見対立と頻繁なボイコットで会議はしばしば停滞した。クシュネルは (1) 住民が話し合わない (2) 同族間ですら協力しない (3) 国際社会の支援が不十分と嘆いた¹⁷。対話という問題解決の基本が著しく困難なほど紛争の傷跡は深かったのである。

議場の外では少数派民族(主にセルビア系住民)への襲撃で多数の犠牲者¹⁸が出ていた。復讐の掟が社会を支配していたのだ。アルバニア系日刊紙コハ・ディクト・レの編集長はミロシェビッチ退陣、セルビア共和国の民主化、セルビア人からの公式で誠意ある謝罪があるまで対話は不可能と断言した。

「国際社会がしつこく言い張るアプロ - チは、非現実的だ。
多民族社会の夢なんて。」(“Comment: The Unrealistic Dream

共存と和解の行方～紛争後のコソボで行き詰まる欧州主導の平和構築～（石井）

of a Multi-Ethnic Kosova”, IWPR BCR No. 144, 31May2000)

深い民族の亀裂にクシュネルは「絶望」したと率直な心情を吐露している。絶望は現場の実務家の間で軍民間わず共有されていた¹⁹。

「『彼らはいまだに深くお互いを憎んでいる』彼はため息
について続けた。『私は世界中のどこよりも、カンボジア
やベトナムやボスニアよりも、深い憎悪にここで出会った。』
(“A Year of Small Gains For UN Chief in Kosovo ;
Kouchner Persists Against Balkans Hatreds”,
International Herald Tribune, July 18, 2000)

過酷な現実には焦ったのは国連首脳だけではない。復讐の標的の少数民族、特にセルビア系住民も同様だった。それまで約 10 年間極端なセルビア民族主義により優遇された彼らには難民になるか山奥に隠れ住むしかない屈辱は受け入れ難いものだった。コソボのセルビア系宗教指導者アルテム工卿の右腕サヴァ卿は同胞の心情を代弁する。

「多くの者は新しい現実に気付かないか単にそれを忘れた
いのである。毎日軍と警察が戻ってくるのを待ち望んで。」
(*Nezavisna Svetlost, 2000. July 8 ~ 15*)

「常にセルビアの文化と文明の揺籃の地であり、その民族的国家的精神的アイデンティティそのもの」²⁰だったコソボはセルビア人には戦略上も重要で、現在も約 12 万人が迫害に耐えてコソボに残る。20 世紀初頭セルビアは二度のバルカン戦争で領土を拡大しバルカン一の強国になり、中世セルビア王国の栄光に思いを馳せ、国内外の同胞を統合する「大セルビア」の実現を試みた。20 世紀末にミロシェビッチも「大セルビア」を再現しようとし、それに同調したコソボのセルビア系住民も少なくはなかった。目論見が挫折し、迫害されて生命と生活を脅かされている彼らは、事態を打開するために策を練った。

UNMIK の現状認識の甘さ²¹に焦れたサヴァ卿は少数民族の「生活改善の責任を UNMIK が負う」旨を文書化して署名させる²²。これが『民族共存への課題 (Agenda for Coexistence)』²³だ。クシュネルが 2000 年元日の演説で紹介し、4 月にセルビア国民会議

(Serbian National Council)も承認している。こうしてセルビア系住民は膠着した現状打破の責任を UNMIK におしつけることに成功したのだった。

『民族共存への課題』は冒頭でセルビア系住民のコソボ暫定統治への参加をうたう。JIAS²⁴や KTC、新設のコミュニティ・オフィスを通じた全面参加だ。UNMIK の狙いは新オフィス設立により、少数派住民の生活改善だけでなく、多数派民族が支配する地方行政機構に少数派民族を組みこみ全職員に「共存」の意識改革を促すことだった。少数派民族を専門に担当するコミュニティ・オフィスを行政区レベルに設けて地域・中央レベルで活動を調整し、少数派民族の行政サービスへのアクセスを確保する。オフィスには少数派住民が雇用され、形式上は多数派民族と少数派民族が同じ傘の下に入ることになる。カリン・フォン・ヒッペル²⁵も新オフィスが地方行政の統合と草の根の信頼醸成に寄与すると期待した²⁶。

ただコミュニティ・オフィスはパラレル・システムと化す懸念があった。ベオグラードからの指示でセルビア系住民が、事実上アルバニア系住民が支配する地方行政システムとは別に、独自の運営をしようとするのではないかとアルバニア系住民は危惧したのだった。統合の実現か分離の促進か、新オフィス設置は諸刃の剣だった。

1 - 3 . なまなましい憎悪が障害に

私がロ - カル・コミュニティ・オフィサー - (以下 LCO)を拝命したのは 2000 年 7 月だ。LCO は『民族共存への課題』で新設されたコミュニティ・オフィスを実際に各行政区で立ち上げ監督するスタッフを指す。配置される行政区は最初の約 20 区から²⁷段階的に増えた。私の勤務地スケンデライ・スルピツァ市は少数派民族が少なすぎて²⁸当初は LCO 不要とされたが、後にリストに加わった。「少なすぎる少数派」は無視されやすいからこそ目配りが必要だと、当地トップの国連暫定地方行政官 (Municipal Administrator : 以下 MA) が主張した結果である。

さて職務²⁹の目標は多民族社会建設のための環境整備だった。地方自治体の一部として、人権・安全保障・経済発展などの分野で関係機関との連絡調整を行い、少数派民族に適切な公共サービスを提供するのが主要任務だ。だが活動環境は二つの点で特殊だった。一つは指揮系統の二重性、もう一つは安全環境である。通常各行政区に配属されたスタッフは MA の指揮下に入るが、LCO は中央の Office of Community Affairs からも指示を仰ぐ。この指揮系統の二重性は LCO と MA 及び他のスタッフとの緊張を生んだ。さらに柔軟な

対応を可能にすべく大雑把に記された職務内容と現地での慢性的な人手不足のため、広範な業務をこなさねばならない羽目にもなった。だがこれは結果的に LCO の身を守った。職務に忠実に少数派民族の保護に専心すると多数派住民の反発を招く。実際嫌がらせや中傷など、不愉快な思いを経験した LCO は少なくない。LCO は常に周囲 - 上司・同僚及び現地住民 - との緊張の中で活動していた。

さてスケンデライ・スルピツァ市はコソボ中央のドレニツァ渓谷にあり周囲に海拔 600m の丘陵が連なる。約 378 平方 km の面積に約 65000 人が住み、53 の町村をもつ³⁰。コソボでも経済発展が遅れた農業主体の地域だ。主な産業はレンガ造りだがプラスチック工場などと共にいまも閉鎖されたままだ。

ここはコソボ随一の反骨精神にとむ地域で帝国支配への抵抗の歴史を誇る。

「スケンデライは反体制的な地域の中心、いやアルバニア人の住むすべての土地で最も反体制であろう。」(*Skënderaj: the past, the present, the perspective*, January 2000)

(OSCE “KOSOVO / KOSOVA: As Seen, As Told” 1999 より)

さらに、古代からバルカンにいたアルバニア人は他民族に支配されない「特権 (Privileges)」を持つという。英雄も多く輩出した。1912 年のアルバニア独立の指導者ハッサン・ベリシャはスケンデライ・スルピツァ市出身だ。スケンデライ (Skënderaj) という地名も 15 世紀のオスマントルコに抵抗したアルバニアの英雄スカンデルベグ (Skënderbeg) に由来する³¹。最近では同市出身のコソボ解放軍最高司令官アデム・ヤシャ - リが 1998 年 3 月セルビア軍の襲撃に一族で討ち死にして現代の英雄になった。実際スケンデライ・スルピツァに来て私が初めて覚えた歌は彼を称えた歌だった。

「死を恐れないアデム・ヤシャ - リ... (略) ...伝説のアデムは死んでいない。」(「He is alive」 Violet Kukaj-Ratkoceri)

スケンデライ・スルピツァ市にコソボ国際平和維持部隊が進駐した 6 月 18 日は市の解放記念日になったが、その 1 周年記念式典で哀愁漂う短調のメロディ - と共にこの歌詞が響き渡った。アデム・ヤシャ - リが指揮したコソボ解放軍が初めて公の場にてたのは 1997 年の末という³²。1998 年 3 月短い生涯を閉じた後も彼の遺影は喫茶店にまで飾られ、その武勇は語り草となっていた。スケンデライ・スル

ピッツァではアルバニア系住民誰もが誇らしげに郷土の英雄を語る。人々の胸にこの英雄は今もなお生き続けているのだ。



ところでセルビア人とアルバニア人の対立は「コソボは一体誰の土地か」という点につける。ツィマーマンはミロシェビッチの歴史観を次のように紹介している。

「『コソボは、昔からずっとセルビア人のものだった』と、ミロシェビッチはコソボが500年以上もオスマン・トルコ

の支配下にあったという事実を無視して語った。『コソボのアルバニア系住民に権利がないというのは笑止千万だ。欧州で彼らほど権利を有する少数民族はいない。彼らこそ長年セルビア人の権利を侵害しており、セルビア人はそれを正そうとしている』(*Newsweek*, 1999年4月21日号 p22)

一方アルバニア人は自らをバルカン半島最古の土着民族集団として、コソボの先住民としての地位を主張する³³。

「現代アルバニア人の祖イリリア人は紀元前2世紀に西バルカンを支配した。」(*All about Albania: History & Government, Ministry of Foreign Affairs, Albania*)

これに対してセルビア人は1168年コソボのプリズレンを首都に独立王国を建設した事実を強調する。「中世の時代では、コソボとメトヒヤは繁栄したセルビア王国の中心地で、人口の大多数はセルビア人」³⁴だった。セルビア正教会の総本山コソボのペ・ヤ・ペチには「セルビアの文化的歴史的記念物、教会と修道院」も多数ある。「民族集団としてのアルバニア人」は14世紀に「はじめて言及」され、セルビア人の方が民族として先にコソボに現れたというのだ。そして1389年オスマントルコの侵攻にセルビア王国とアルバニア諸侯が連合を組んで共に敗れた史実は、不思議にもセルビア民族の悲劇として有名になり、「大セルビア」の思想的背景になっている。

「すべてのアルバニア人の領土を統一する」³⁵のを戦略的目標にした「大アルバニア」の思想のベ・スは、1912年アルバニア独立の代償に「コソボをセルビア人に譲渡」³⁶したときに引き裂かれたアルバニア系同胞へのシンパシ・である。コソボのアルバニア系指導者イブラヒム・ルゴバは自ら「分断された民族」³⁷と呼び、当面の目標は「独立した国家」の樹立だが「アルバニアとの国家連合」も視野に入れる。アルバニア共和国もコソボを外交の「プライオリティ」³⁸にしている。

土地の所有権やその正統性、そしてそれを支える思想いずれの点においても互いに主張は真っ向から衝突している。ここで両民族の対立が凄惨な武力紛争にまで発展した政治的背景を理解するのに、多数派と少数派の力学に言及せねばなるまい。

セルビア系住民の反アルバニア感情の裏にあるのは恐怖である。1945年の連邦建設以来

セルビア人は連邦全体で最大民族でもコソボでは少数派³⁹だ。このねじれは彼らを屈折させ、アルバニア人の「高い出生率」がコソボの「民族的人口的有り様を本質的に変え」⁴⁰ると怯えた。また大胆な分権化を図った 1974 年の憲法改正でのコソボの権限拡大とアルバニア系住民の地位向上にセルビア系住民は不満をもった。これをみたミロシェビッチは 1989 年コソボから主要権限を奪い、少数派セルビア系住民の支持を集め政界トップに躍り出た。

コソボ全土が急進化したのは 1998 年 3 月だ。公職追放やアルバニア語教育の禁止などさまざまな弾圧を受けたアルバニア系住民は 1991 年コソボ共和国を宣言し、初代大統領イブラヒム・ルゴバのもとパラレル・システムを運営していたが、非暴力の抵抗を説く彼の影響力は 1997 年夏には落ちていた。ミロシェビッチ政権による弾圧は激しくなる一方で、アルバニア系住民によるコソボ独立は長く国際社会に認められていなかったのである。州都プリシュティナでは集会が開かれた。

『『独立!独立!』人々はそろって繰り返した。『命は諦めてもコソボは諦めないぞ』』(“More rallies, no talks in Kosovo”, CNN, March 13, 1998)

スケンデライ・スルピツァ市の中心部から車で 5 分のラウシャ村でも、アルバニア系住民がコソボ解放軍 (Kosovo Liberation Army : KLA) のゲリラ活動に積極的に参加するようになっていた。

「住民がゲリラ活動に参加するようになったのは今年 3 月。近隣の村で K L A の創設メンバー、アデム・ヤシャリが殺害され、親族や友人ら 53 人が巻き添えになった事件がきっかけだ。今ではラウシャの全住民が K L A のメンバーだ。」(Newsweek, 1998 年 7 月 22 日 p.31)

スケンデライ・スルピツァ市は紛争中はコソボ解放軍の、紛争後は解放軍が合法的に政党化したコソボ民主党 (Party of Democratic Kosovo) の拠点として名をはせた。ここに紛争後も残ったセルビア系住民は 300 人足らずで、市全体の人口の 0.5%にすぎず、修道院と 2 つの村に孤立した形になった。アルバニア人の伝統「ベサ (Besa)」は子孫に復

警を暫わせるが、虐殺や虐待の復讐はこのときも伝統通り行われていた。実際、市の西北部にあるセルビア系パンニャ村の住民は同胞に窮状を訴えている。

「『我々はたった 2～3km 四方も安全に動けず、フランス軍のエスコートなしには遠くへ行けない』とコパチェビッチは言い、この 9 ヶ月間にアルバニア人テロリストがセルビア人を 4 人殺し 8 人負傷させたと付け加えた。(*Tanjung, 6 April 2000, "Serbs from the Village of Banje Living in a Concentration Camp"*)

24 時間軍隊に警護された少数派のセルビア系住民をいかに保護してアルバニア系住民が支配する新しい社会体制に参加させていくか - 私が着任した当初の 2000 年夏、それが一番の難題だった。

2. 現場からの視点

国連コソボ暫定行政ミッション最高責任者ベルナード・クシュネルは「The Long Path Toward Reconciliation in Kosovo」と題したエッセイを *Los Angeles Times* 1999 年 10 月 27 日号に寄せ、独自の和解プランを披露している。彼は和解の可能性を否定しないがそこへ至るプロセスが「長く、ゆったりした」もので国際社会から「より一層の時間と決定と支援」が必要と訴えた。クシュネルのプランは：(1) 暫定行政機構が治安の改善を図る(2) 信頼醸成措置によって共存を促す(3) 和解を達成する(4) 少数派民族をもといた共同体へ帰還させる、という 4 段階の戦略である。だが現実には計画と違った。彼は約 1 年半の任期を終える直前の 2001 年 1 月 12 日、少数派民族とくにセルビア人を保護できなかった「失敗」を認めている⁴¹。戦略の第一段階・治安の確保に失敗し、和解プランは最初の第一歩で頓挫したのだった。なぜ挫折したのか、現場で見られた様々な障害を分析し、その理由を考察してみたい。

2 - 1 . 憎みあう人々が対話を再開するまで

スケンデライ・スルピツァ市で最大の少数派民族はセルビア人で⁴²統計上は市の全人

口の0.5%にすぎないが、彼らの政治的な重みは甚大だった。『民族共存への課題』がめざす多民族社会の実現が主に「アルバニア系住民とセルビア系住民」という二つの民族の共存にかかっているのは、前章で述べたように現地の政治情勢や政策形成の経緯から明白だ。圧倒的多数派が0.5%の少数派を、無視も拒否もせず受け入れることが共存の第一歩だ。それには対話再開が急務だった。

和平合意から一年後の2000年6月、セルビア人とアルバニア人の間に暴力以外の接触はなかった。仲介の労をとるLCOの筆者に協力するアルバニア系職員はほぼ皆無で、数少ない協力者は「裏切り者」と同胞に脅迫され職を追われた。「共存」など誰も口にしないアルバニア人の中で彼らの「敵」セルビア人との対話を準備するのは、孤独だった。これはLCOが共有する孤立感だ。

私が着任するまでのセルビア人とアルバニア人の対話はすべて挫折していた。1999年10月から12月に地方政治指導者層で、2000年3月から6月は村長レベルで国連暫定行政官(Municipal Administrator: MA)による集中的な交渉が行われたが、実現しなかった⁴³。障害になったのは日時や場所の不都合、参加者の過去の経歴、安全保障上の懸念など様々だが、根底にあるのは「会いたくない」という気持ちだ。住宅の90%以上が破壊・焼失して数千人が殺害されるなど、被害が甚大だったアルバニア系住民の拒否反応がとくに強かった。野獣のように殺戮を繰り返した敵に話し合いなど無駄だ、という者さえいた。話し合う必要を認めていなかったのである。

まず私はアルバニア系住民が独占する市評議会へのセルビア系住民の参加を目指した。MAが1999年11月以来引きずっていた課題だ。評議会はMAの諮問機関で決定権もないが⁴⁴、地方レベルの対話の枠組として利用可能だった。議論の焦点は議席配分と議員候補者の適性であった。アルバニア系住民によると、僅か0.5%のセルビア人には最大20議席の内の1議席(5%に相当)すら多すぎ、さらに戦争犯罪人は議員の資格なしだという。私はMAと相談してセルビア系評議員候補を二人選んだ。市内の村から一人と市外へ離れた集団から一人選んだのは難民及び国内避難民の帰還を見据えての配慮だ。当時のアルバニア系評議員十数人への説得工作をとおして、出席予定議員の過半数が二候補の参加に反対しないと秘密裏に表明した。だが参加の是非を審議する2000年7月13日の評議会では、アルバニア系評議員の強硬派が頑強に抵抗を見せて穏健派は奇妙な沈黙を守り、結局セルビア人の評議会参加を拒否した。

この日は当時の岡村善文 UNMIK 特別顧問も『寛容のためのプレゼンテーション(Presentation for Tolerance)』と題して演説していた。「二つの民族の分断(the two

ethnic divide)」は大きな障害であり、紛争の傷跡は理解するが欧州への仲間入りには「平和的共存とすべての暴力の停止」が必要だ。中央政界ではセルビア人との対話も始まり「過激派」の脅迫には怯むべきでない。先の紛争は「よりよいコソボ」を目指しこの「スケンデライで始まった」のだから「暴力と差別からの解放」を今こそ率先して行おう - と締め括った。この演説には、和解には「一世代かかる」との現実的認識と「民族アイデンティティをとわず平和に暮らす」共存への期待が混在して、当時のクシュネル周辺の思惑が滲み出ている。ただ演説自体は評価されたものの、対話の実現には繋がらなかった。国連首脳の意図が現地指導者に届かなかったのは何故か。それを解き明かすには、現地住民の内部の勢力関係を知らなければならない。

アルバニア人は一枚岩ではない。多民族社会建設への姿勢は政党によって微妙に違う。ルゴバ率いるコソボ民主同盟⁴⁵（LDK）などは一般に、ハシム・サチ⁴⁶率いるコソボ民主党（PDK）などより柔軟だ。だがそれも生命と安全を確保できる範囲でしかない。残虐な殺戮があったコソボ解放軍の拠点で、共存の鍵を握る穏健派は、過激派の脅迫と民衆の反セルビア感情を前に力を失っていた。

セルビア人も一枚岩ではない。7月20日仕切り直しの評議会にセルビア系住民はLCOを通じて代表を3名にしたいと要求した。この増員要求はセルビア系住民内部の勢力関係が原因だった。当時市内にはセルビア系の村が2つあり、一方の村民に両方の村を代表させようとして2つの村の主導権争いが表面化し、結局各々一人ずつ代表を出したいと言いだしたのだ。国内避難民の代表は逃げた負い目から残留住民に遠慮がちで代表の辞退すら申し出たが、難民・国内避難民の帰還の重要性を考慮すると、LCOやMAとしてはなんとしても参加してもらわねばならなかった。しかしもちろん3人代表という要求は到底受け入れられないものであった。このように双方の内部の勢力争いが対話実現に深刻な負の影響を与えていたのだ。

2000年8月末、セルビア民族会議（Serbian National Council：SNC）の幹部がスケンデライ・スルピツァ市を訪問しアルバニア系・セルビア系双方の地元指導者に会うことが決まった。コソボのセルビア系住民に大きな政治的影響力を持つSNCの訪問は、各地を視察するプロジェクトの一環で、この市の両コミュニティの対話には絶好の機会だ。だが前夜に突然中止になった。警察幹部が安全保障上の懸念を示したうえに、スケンデライ・スルピツァ市がある北部地域を管轄する国連行政官（Regional Administrator：以下RA）が中止を進言したことから、州都プリシュティナのUNMIK首脳が中止の決定を下したのである。実際「セルビア人が町にいる」との噂だけで住民が無関係の車両に放火した事件

も起っており、市内での両民族の対話はまだ危険だと判断されたのだった。ただし当市のアルバニア系指導者らは、対話に備えて当日の朝待機していた。やっと会う気になったアルバニア系指導者の覚悟を、UNMIK が台無しにする形になったのである。

この失敗を重く見た RA は北部地域の中心都市で隣接するミトロピツァ市でスケンデライ・スルピツァ市のアルバニア系・セルビア系指導者による対話を提案する。ミトロピツァ市自体も特に民族対立が激しく、セルビア系住民の住む北とアルバニア系住民の住む南に分裂していた。両者を隔てるイバ - ル川にかかる橋は民族対立の象徴になっている。そこで 2000 年 9 月 5 日に RA 主催の紛争後初の対話の実現した。これは 1 週間後にスケンデライ・スルピツァを訪れた UNMIK 最高責任者クシュネルに高く評価された。

初会議にはアルバニア系の市長ら二人と、セルビア系の二人の村長と国内避難民代表一人が参加した。会議は和やかな挨拶と握手で始まったが、議論は激しく衝突した。アルバニア人側は戦争犯罪への「謝罪」、セルビア人側は「安全保障」を求めた⁴⁷。するとセルビア人側は相手の紛争後の復讐と暴力に「謝罪」を求め、アルバニア人側は「安全保障」は軍と警察の仕事だと突き放す。問題解決の困難を悟った両者のその後の態度は対照的だった。計 5 回の会議で⁴⁸一度会議に出たアルバニア人は時間の無駄と考えたのか二度と来なかったため、毎回違うアルバニア人と⁴⁹ほぼ同じ面々のセルビア人が会議に臨む結果になった。

ここに見て取れるのは現状認識における危機意識の差である。アルバニア系住民は復興と開発のため国際社会と良好な関係を保つことに専念し、基本的に現状維持で構わない。300 人程度のセルビア系住民は無視できなくはないと考えるのだろう。一方セルビア人は市外やベオグラ - ドの同胞からの支援も心細く、なにより市内では圧倒的に少数派だ。せめて日々の安全と移動の自由を確保するために、近隣のアルバニア系住民と話しあわねばならない。

だがセルビア系の 2 つの村（ス - ボ・グル口村とバンニャ村）に挟まれたアルバニア系スリガン村に対話の意思はない。実は現在のス - ボ・グル口村に住むセルビア人とスリガン村に住むアルバニア人は戦前に同じ 1 つの大きな村に混住していた。紛争を契機にその村は二つに分裂し、隣人同士が敵味方になって殺し合う惨劇は激しい近親憎悪を生んだ。アルバニア系住民は紛争中に行方不明になったままの 3 人の村民の行方がわからない限り、そして奪われた数十台のトラクタ - が返還されない限り、セルビア系住民との話し合いに応じる気はないという。スリガン村では今も、3 人の行方不明者が出たほか数人が殺害された襲撃事件の日に、毎年追悼集会を開いて「犯人に違いない」セルビア系住民への憎し

みを新たにしている。一方のス・ボ・グル口村のセルビア系住民は、自分達ではなく遠方から派遣されてきた治安部隊の仕様だといってアルバニア系住民の「思い込み」を非難する。両者の主張は全くかみ合わなかった。スリガンの村長は、村レベルでも対話をすすめようとする LCO や MA と断固として拒否するアルバニア系住民との板挟みになって、結局村長の座を退いた。その後 2000 年 10 月の地方選挙でスリガン村から選出された市議会議員は、反セルビア強硬派の急先鋒となった。

2 - 2 . 行政面での統合と政治面での分離

対話は 2000 年 10 月のコソボ地方選挙の直前に一時中断した。2000 年秋はコソボ内外で大きな政変と行政再編があった時期だ。9 月のユ - ゴスラビア総選挙、10 月のコソボ地方選挙、12 月のセルビア議会選挙と立て続けに 3 つの選挙があった。11 月にはコミュニティ・オフィスが設置されて、いよいよ多民族社会を具体的に実現する制度が地方行政システムのなかに作られた。これらの出来事は、コソボの住民には自らの民族集団の利害と将来のビジョンをあらためて意識する契機となった。

9 月 24 日ユ - ゴスラビア総選挙の日、筆者は市内 7 ヶ所に設置された投票所⁵⁰に行き選挙に「立ち会（witness）」った。UNMIK は当初、当時のミロシェビッチ大統領が「コソボの暫定行政に責任を持つ唯一の」権威 UNMIK に相談せずコソボで実施した選挙を「参加も、支持も、組織も、どんな意味での容赦や合法化もしない」⁵¹と非難したが、直前に「合法とは認めない」が「立ち会って監視はする」⁵²と決めたのである。筆者と同僚は木枯らしの吹く戸外で、投票するセルビア系住民を一日中数え続けた。

セルビア系住民にとりコソボはユ - ゴスラビア連邦内のセルビア共和国の中の自治州だ。その「連邦の領域内」で行われる選挙への参加は彼らにとって当然の権利だ。セルビア系住民らは 12 月 23 日のセルビア共和国議会選挙にも参加した。「共和国の領域内」で行われた選挙だからだ。だが 10 月 28 日「コソボで」行われたコソボ地方選挙はボイコットした。3 つの選挙の参加と不参加の背景には何があるのか。

第一にミロシェビッチの強力な介入があった⁵³。コソボは彼の最重要支持基盤だ。1980 年代末彼はここでセルビア民族主義を鼓舞しセルビア系住民の支持を得て、最終的に連邦大統領の地位についた。だがミロシェビッチは 200 年後半になって民衆の不満、野党の台頭をみて不安を覚え、確実な政権維持のためコソボ約 12 万のセルビア人票を欲した。そこで 2000 年 9 月の総選挙に UNMIK 最高責任者クシュネルからの公式な許可もなく、強

引にコソボも選挙区に含めたのだった。

第二にセルビア系住民によるコソボ独立への恐れがあった。難民及び国内避難民の帰還が遅れるコソボでの10月の地方選挙に、本来の民族比率は反映した結果は求められない。だが紛争前でもセルビア系は数の上から言えば圧倒的に不利だった。本音は、コソボの新たな政治体制や行政機構に自らの選挙参加を通して正統性を与え、その正統性をもった体制が多数決原理に則ってアルバニア人に支配され、「コソボ共和国」の独立が今度こそ実現してしまうのを恐れたのだ。

「10万人ほどはまだ地方選挙をアルバニア人独立

- 黙認できないこと - への最終ステップと見ている。」

(*Ridvan Berisha, IWPR, BCR No. 185, 13 October 2000*)

コソボ独立が自らの不利な立場を恒久化することは明白だったので、2000年10月のコソボ地方選挙はボイコットしたわけである。

バルカン政治のタ-ニングポイントとなった事件が起きたのは2000年9月のユ-ゴスラビア総選挙でだ。セルビア系住民の大多数がミロシェビッチに投票したものの、セルビア野党民主連合(DOS)のボイスラヴ・コシュトニツァが連邦大統領になりバルカン半島の政治情勢は一変した。ミロシェビッチ退陣の衝撃がコソボ全土を走ったのは2000年10月6日である。新生ユ-ゴスラビアにはEU参加への道筋も示された。しかしコソボのセルビア系住民は新大統領に困惑し、「大統領は今でもミロシェビッチ」といってはばからない者もいた。

「民主的ユ-ゴスラビア」が国際社会の関心を集めると、アルバニア系住民は独立の正統性が相対的に弱まると懸念しはじめた。そしてアルバニア系住民はコソボの早期独立に向け、主導権争いを本格化した。2000年10月28日のコソボ地方選挙において、コソボのほぼ全土で勝利したのはイブラヒム・ルゴバ率いるコソボ民主同盟(以下LDK)だ。投票率も高く、穏健派が勝利した結果となった⁵⁴。

こうして9月の「セルビア人の選挙」と10月の「アルバニア人の選挙」が終わった。結果は双方ともUNMIK首脳にとっては歓迎すべきものになった。しかし政治面での民族の分離は隠しようもなく、多民族社会の実現に向けて大きな障害として残った。

さて選挙の興奮さめやらぬ11月1日、セルビア系のパンニャ村にコミュニティ・オフィスがオープンした。『民族共存への課題』が作った少数民族民族のためのオフィスだ。初

日の仕事は3人のセルビア系職員と粗末な空家でスタートした。コミュニティ・オフィスの設置はLCOによって市の幹部会に報告され、アルバニア系住民がセルビア系住民と共に社会を運営する仕組みを幹部会が追認した形になった。民族共存の実現に向けて行政面での統合が図られたのだ。

ただしここでセキュリティが障害になった。オフィスの長（セルビア系住民）には幹部会への報告義務があったが、アルバニア系住民が住む町に来て幹部会に出席することはなかった。民族共存のために導入された画期的な地方行政のシステムは、形式は整っても実際の運用には大きな困難が伴ったのである。

「セルビア人が来ない」のは地方選挙後に新設された市議会も同じだ。規定の31人は選挙の結果PDK27人とLDK4人が占め、セルビア系議員2人が追加指名されたので計33人が市議会を構成する。UNMIK首脳は選挙ボイコットを理由にコソボ最大の少数民族を地方政治から締め出す愚を避けて、セルビア人をはじめとする少数民族住民を特別に議員として追加指名したのだ。政治面での統合を図ったのである。しかしセルビア系住民らは市議会に来なかった。

たしかにセキュリティの問題は大きい。例えば記念式典の直前11月8日に起きた別の少数民族アシカリ4人の殺害事件は、少数民族とくにセルビア系難民の帰還を断固阻止するとのメッセージだったとみられている。市議会議員の初顔あわせという民族共存への第一歩をアピールする絶好の機会に水をさす、政治的な思惑に基づいた事件だった。

だが障害はセルビア系住民の巧みな戦術にもある。2000年10月の地方選挙をボイコットしたのと同じ理由で、彼らは「非公式な」交渉によって実利を得て「公式な」会議への参加は最小限にする戦術を取っていた。

もう一つの障害は2000年12月23日のセルビア共和国議会選挙である。セルビア系住民は、セルビア共和国議会とコソボ市議会の双方に参加することに整合性を見出せず、結局前者を選び、後者を軽視したわけだ。これはアルバニア系住民の反感を買い、12月23日選挙当日バンヤ村で放火事件が起きた。両者の溝は深まるばかりだった。

2 - 3 . 共同事業の失敗

対話再開によって突破口が開き、選挙後の新しい社会体制が枠組が提供し、いよいよ民族共存のための具体的な事業を起す段階になった。安全保障と地方行政の研修事業の二つの分野で、共同事業が始まった。

2000年12月11日セルビア系のス・ボ・グル口村で地雷が爆発し、道路補修プロジェクトの現場へ向かう途中だった一人が死亡もう一人が瀕死の重症を負う事件があった。補修予定の道路は険しい山を越え隣接するズ・ビン・ポトック市（セルビア系住民が多数を占めるコソボで3つしかない都市のひとつ）をとおり、ユーゴスラビア連邦の首都ベオグラ・ドへつながる、文字通りセルビア系住民にとっての生命線だった。

スケンデライ・スルピツァ警察は以前から人員不足により村への定期的な巡回もしていなかったが、この事件以降セルビア系住民らの本格的な安全保障対策を検討しだした。村内に現地住民主体の警察組織を設置することや定期的な巡回、アルバニア系指導者らとの対話を進めることなど要求が出てきて、行き詰まっていた両者の対話が安全保障問題を中心に再開した。

この地雷事件の背景には2000年秋の選挙後に頻発した暴力事件がある。クシュネルはこれらが「変革の風」に逆らった行為で「国際社会とコソボの穏健派指導者らに対する明確なメッセージ」と理解していた。この頃セルビア南部のプレシェボ渓谷でアルバニア系過激派武装組織がセルビア警察に対して武力闘争の構えを見せたが、その企みを彼は看破している。

「もし誰かがプレシェボで暴力を煽って NATO をセルビアとの対立に巻き込もうと計算しているならそれは間違いだ。」
(UNMIK Press Release, 7 December 2000 “Top UN official in Kosovo briefs new policy council on recent violence”)

1999年春 NATO のコソボ武力介入を導いたように、プレシェボ渓谷で「2匹目のどじょう」を狙ったのだ。結局地雷によって道路工事は中断されたが、セルビア系住民はベオグラ・ドとの絆を断ち切るどころかますます強めてしまった。

2001年1月5日紛争終結後初めてセルビア人がスケンデライ・スルピツァの中心の町に来た。会談は警備の厳重な国際平和維持部隊（以下 KFOR）の基地で行われた。確認されたのは安全保障環境の改善に KFOR は軍事的、警察は警察の、UNMIK は政治的アプローチで臨む点だ⁵⁵。アルバニア系市長は「この種の会議で問題は解決しない」と断言し、「二つの民族集団の間に信頼が欠如」しているのが問題なのであって、住民の「行動様式が変わる」には時間が必要だという。セルビア系住民は「移動の自由」の確保のために不可欠な近隣のアルバニア系住民の同席を求めたが、市長は時期尚早と繰り返した。

「アルバニア人は心理的にも現在おかれている環境から
もそう簡単に過去を忘れられない。誰にも安全は保障
できない。」(Ramadan Gashi, “KFOR Security Meeting :
5 January 2001”)

MA は対話こそが問題解決の「唯一の魔法の杖」であると、「暴力反対決議」の市議会での採択を提案した。

セルビア系住民は「たった一枚の紙切れ」よりも具体的な対策を近隣の村人と話した方が現実的と考えた。アルバニア系住民は話し合うこと自体に抵抗し、犯罪組織が暗躍する中で安全保障など「不可能」という。後日 MA の提案した決議案は市議会でアルバニア系議員の凄まじい反発を招いて、暴力反対決議は宙に浮いた。セルビア人の焦りとアルバニア人の抵抗は、MA や LCO をはじめとする UNMIK スタッフの知恵や努力もむなしく、変わらなかった。

さて 2001 年 1 月 5 日の会議では、MA から近代的な行政手法を学ぶための研修プロジェクトに双方のコミュニティの指導者らが公式に招待されたことが公表された。このプロジェクトはかつて当市で勤務したデンマ - ク人スタッフが、勤務当時同僚だった現地職員らを慰労の意味も兼ねて母国へ招きたいと企画したのだった。

問題は参加者の顔ぶれだ。人数制限のため原則的に部長級以上の重役が参加を許された。さらに企画者が勤務していた当時の現地職員はアルバニア人のみだったが、その後セルビア系職員も雇用されていた。これを幸いに MA と LCO の私は両方の職員を招き、研修旅行計画を両コミュニティの信頼醸成に利用しようとした。だが出発直前の 2001 年 1 月部長級の人事異動で幾人かが入れ替わった。手続や時間の都合上、旧部長を参加させざるを得ず、海外出張の機会を逃した新部長の抗議は、セルビア系職員の参加もあいまって激化した。

そして研修旅行出発の 1 週間前 2001 年 2 月 2 日私のオフィスに脅迫状が来た。アルバニア語で「幸運」と名乗る団体からセルビア系住民代表へ宛てた手紙だ。研修旅行に参加すれば命の保障はない、LCO の私にも任務を去れという。結局脅迫者の思惑通りアルバニア人のみが参加し、私は市を去ることになった。

しかし実はセルビア系参加予定者はマケドニアとの国境まで来ていた。越境手続に 5 時間も手間取り、さらにアルバニア系支配地域でセルビア人の警護は長時間は困難と KFOR が言いだし、そのセルビア系住民は国境越えを諦めたのだった。当時隣国マケドニアでは

少数派アルバニア系住民がマケドニア政府との対立を深刻化⁵⁶させていて、両者の相互感情は悪化していた。合同研修旅行は民族共存のエッセンスが抜けたばかりか、逆に思わぬ民族との対立を顕在化させる結果となったのである。

2001年の初頭はスケンデライ・スルピツァ市に隣接するミトロピツァでも緊張が高まった⁵⁷。セルビア南部ブレシェボ渓谷の暴力事件で国連安保理が非難決議を採択したのもこの頃だ。民族分断の地ミトロピツァ市で1月末最高潮に達した民族対立は2月2日に沈静化したところだった。それと同じ日に届いた脅迫状は一連の動きと無関係であるはずもなく、既に勤務開始から9ヶ月目を迎えた私はLCOとして住民に広く認知されており、任務継続は危険と判断され即刻退避勧告を受けた。私は民族共存のための活動を志半ばで中断せざるをえなかった。現場にはまだまだ多民族社会の建設を望まない者がいたのである。

おわりに

2001年の冬、コソボにおいて多民族共存社会はまだ実現していなかった。実際に現場で展開された「共存」の政策は必ずしも成功していない。少なくとも対話は再開されて、地方の行政や政治の新しい枠組を利用しつつ共同事業も始まっていたが、相変わらず暴力が幅を利かせていて成果は芳しくなかった。

ただクシュネルのプランどおり「共存」を経て最終的に「和解」へ至る可能性が全く否定されたわけではない。UNMIKは和解よりもまず共存を達成する政策をとった。和解は西欧で宗教戦争の手詰まりから紛争解決方法のひとつとして編み出された歴史を持つが、それを憎悪と復讐の渦巻く今のコソボに適用するのはいささか無理があるように見える。数世紀に及ぶ民族対立の歴史や怨念と近年の凄惨な暴力は、アルバニア系住民とセルビア系住民の敵対関係を決定的にしてしまった。「敵との一時的な共生」を可能にする共存の政策の方がより現実的なのである。その点でUNMIKの採った政策は評価できるだろう。

ではその政策が効果をあげなかったのは何故か。本章で指摘した数々の障害のうちでも大きいと考えられるのは、コソボを取り巻く政治的な環境だ。2000年10月のミロシェビッチ政権崩壊後こそ動揺がみられたものの、2001年5月にミロシェビッチがハ・グ国際法廷に移送されると、その後2001年11月のコソボ州レベル選挙にはセルビア人も参加するようになった。2002年3月にはようやく多民族構成の組閣も完成して、いよいよ実質的な自治が始まる。コソボ紛争を煽動したミロシェビッチの去就とセルビア共和国の内政

の変化が、セルビア系住民の行動に大きく影響したとみていいだろう。

そしてもう一つは曖昧なままのコソボの地位問題だ。セルビア人もアルバニア人も EU への統合という目標を共通にしても、コソボを独立させてからなのか、連邦を維持したままでいくのか、意見は真っ二つだ。欧州という一つの地域にとりこんでいくという戦略構想は画期的で魅力的だ。紛争を抱える地方をより大きな地域が地域全体として包み込んでいくことで平和構築を促進していくアプローチである。しかしその具体的なプロセスやタイムフレームなどはさほど明確ではない。地位問題に白黒ははっきりつけるべく強力なイニシアティブをとって万が一紛争再発を招けば、欧州統合のプロセスに傷が付き、統合の進展が危くなる。だから見て見ぬふりを決めこんだわけだが、まさにそこが欧州による地域主導の平和構築アプローチの限界なのである。自らも地域としての発展の重大な局面を迎えている欧州には、多少のリスクを犯してもコソボにおける多民族社会実現のための大きな障害を除去する、ということができない。だから、共存と和解の行方はまだ見えてこないのだ。

（Yukiko Ishii, 本学大学院国際関係研究科前期課程）

¹ BBC World News “Call to end Kosovo Violence” (Friday, July 3, 1999)

http://news.bbc.co.uk/1/hi/english/world/europe/newsid_384000/384123.stm より。

² UNMIK ウェブサイト “SRSG Bernard Kouchner’s New Year’s Address”

<http://www.un.org/peace/kosovo/pages/newyear.htm> より。

³ A/50/60-S/1995/1 を参照。

⁴ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/hs/what.html> 参照。

⁵ 『世界難民白書 1997/1998：人道行動の課題』（1997）p13。

⁶ 複合型というのは従来の停戦監視中心の PKO とは違って、包括的政治合意の実施などを主目的とした多機能な PKO のことである。

⁷ S/RES/1244 (1999)。

⁸ 2000年7月に閉鎖されて、2001年4月以降は司法・警察分野になった。

⁹ 住川治人『コソボの国際管理と将来の展望：国際貢献を考える助けとして』朝日総研リポート No.148, 2001年2月, p12

¹⁰ コフィ・アナン国連事務総長は、欧州によるバルカン再建への経済的支援の規模を考慮すれば SRSG は「European」であるのが正しいと認めた。“Annan aims to appoint UN’s Kosovo chief this week”, *Financial Times*, Jun 28, 1999

¹¹ 「コソボ後1年」渡邊啓貴 毎日新聞 2000年8月21日より。

<http://www.mainichi.co.jp/news/selection/archive/200008/21/0822m012-300.html>

¹² 同上。

¹³ 神余隆博「国連とコソボ - ゴスラヴィア」国際問題 2001年6月号 p52。

¹⁴ “Bernard Kouchner, the U.N.’s civilian administrator in Kosovo, urged the Security Council on Monday to better define the U.N.’s role in the rebuilding of the strife-torn province.” (CNN, March 7, 2000)

¹⁵ セルジオ・デメロ (Sergio de Melo)。1999年6月から7月15日まで暫定特別代表を務めた。

¹⁶ アルバニア人、セルビア人、ボスニア人、トルコ人が参加。

¹⁷ 1999年12月20日号の Der Spiegel のインタビュー -。

¹⁸ OSCE (1999) *Situation of ethnic minorities in Kosovo*, November 参照。

¹⁹ Janez Kovac (1999) *Reconciliation in Kosovo Tougher than in Bosnia*, IWPR Report October によると、ハイレベルの関係者の多くがボスニアよりもコソボのほうがあらゆる意味で困

難であると考えている。

²⁰ 「コソボとメトヒヤに関する基本的諸事実：歴史的背景」

<http://www.twics.com/%7Eembtokyo/>参照。

²¹ 1999年秋にクシュネルが Gracanica を訪問した際に多民族の学校を開けないかと提案したのに対して、Sava 卿がお互いに殺しあうに違いないからきわめて危険だとたしなめた例を取り上げ、現状認識の甘さを指摘している。

²² セルビア系週刊誌 Nezavisna Svetlost (2000年7月8日～15日号)のインタビュー - を参照。

²³

<http://www.parliament.the-stationery-office.co.uk/pa/cm200001/cmselect/cmcaff/246/1021302.htm#a1> より入手可能。

²⁴ Joint Interim Administrative Structure. KTC が政治的な諮問機関であるのに対して、JIAS は執行機関として2000年1月31日に発足した。KTCと同じく、アルバニア人、セルビア人、ロマ・アシカリ、ボスニアックなどが参加する多民族構成となっている。

²⁵ 2000年1月から11月までコミュニティ・オフィスを中心で管轄する Office of Community Affairs 部長だった。

²⁶ 2001年イギリス下院外交委員会第4報告を参照。

²⁷ “Agenda for Coexistence”では17の行政区が候補に上がっていた。

²⁸ 人口は2000年1月の段階でアルバニア人が約65000人、291人がセルビア人、21人がその他の少数民族であった。UNHCR “Kosovo Village List” 9 March 1999, OSCE Human Rights Report 1999 Vol1.p343 “As Seen, As Told” 参考。

²⁹ UNMIK Local Communities Officers :Terms of Reference .

³⁰ OSCE Municipal Profile: Skenderaj/Srbica の統計による。次のウェブサイトで閲覧可。

http://www.osce.org/kosovo/documents/reports/municipal_profiles/municipal_prof_skenderaj.pdf

³¹ ちなみにスルピツァ(Srbica)はセルビア語での市の名前。2000年8月11日の

UNMIK Regulation No. 2000/45 On Self - Government of Municipalities In Kosovo

(UNMIK/REG/2000/45)で市の正式名称は、アルバニア語・セルビア語の順番つまりスケンデライ・スルピツァ(Skenderaj/Srbica)になった。

³² Noel Malcolm, 1999, *Kosovo: A Short History*, Harper Perennial, New York, p.x.

³³ ジョゼフ・ロスチャイルド著 大津留厚監訳 『大戦期間の東欧』1994年 刀水書房 p357

³⁴ 「コソボとメトヒヤに関する基本的諸事実：歴史的背景」

<http://www.twics.com/%7Eembtokyo/>参照。

³⁵ 「コソボとメトヒヤに関する基本的諸事実：歴史的背景」ユ・ゴスラビア連邦駐日大使館ウェブサイト <http://www.twics.com/%7Eembtokyo/> 参照。

³⁶ “History: All About Albania”, Ministry of Foreign Affairs, Albania

<http://www.mfa.gov.al/albania/default.htm> より。

³⁷ *Der Spiegel* April 17, 2000 より。

³⁸ “Kosova : A Priority of Our Foreign Policy” Ministry of Foreign Affairs, Albania

<http://www.mfa.gov.al/kosova.htm> 参照。

³⁹ 1991年の国勢調査ではアルバニア人が81.6%、セルビア人が9.9%になっている。ただし多数のアルバニア人がボイコットしたため、この数字はユ・ゴスラビア統計局による公式推定である。

⁴⁰ 「コソボとメトヒヤに関する基本的諸事実：歴史的背景」

<http://www.twics.com/%7Eembtokyo/>参照。

⁴¹ “UN ‘failed’ Kosovo Serbs” BBC, 12 January, 2001 参照。

⁴² Centre for Social Work 社会福祉事務所のスケンデライ・スルピツァ支部の2000年度の統計による。

⁴³ Ken Inoue, 2000, *Chronology of attempts to organize a meeting between Albanian and Serb* より。以下が主な対話再開のための努力。

1999年9月 国連暫定行政官、スケンデライ・スルピツァ市に赴任。

1999年10月 国連暫定行政官、セルビア系住民（国内避難民も含む）と初の接触。

1999年11月 市評議会の初会合で、国連暫定行政官がセルビア人代表2名を参加させる意志を表明。アルバニア人評議員らから猛反発。

1999年12月 市評議会の第2回会合でセルビア人の参加のための基準問題を論議。

-
- アルバニア人評議員らは断固反対の立場を堅持。
- 2000年3月 村レベルの対話努力開始。セルビア人側は対話再開に積極的だが、アルバニア人側は消極的。
- 2000年5月 初の村レベルの対話は軍隊が安全保障上の懸念を示して延期された。
- 2000年6月 アルバニア系住民虐殺1周年式典の開催のため再び延期された村レベルの対話は、アルバニア系行方不明者と紛争中奪われたトラクタ - に関する情報をセルビア系住民が提供することを条件に三たび延期された。

- ⁴⁴ UNMIK Regulation 200/1: On the Kosovo Joint Interim Administrative Structure の Section8 を参照。
- ⁴⁵ 彼の経歴とこれまでの活動については<http://www.megastories.com/kosovo/rugova/rugova.htm> がまとまっている。
- ⁴⁶ ハシム・サチはスケンデライ・スルピツァ市のプロ - ヤ (Burojë) 村出身。コソボ解放軍の政治部長だった
- ⁴⁷ “Meeting of Serbs and Albanian Representatives”, Dana Stinton, 7 September 2000, “1st Meeting between Albanians and Serb minority”, Yukiko Ishii, September 2000 より。
- ⁴⁸ 9月5日、9月13日、9月19日、10月3日、10月17日の計5回。
- ⁴⁹ 主に市役所の部長や課長クラスが出席した。
- ⁵⁰ ユ - ゴスラビア連邦の発表によると、スケンデライ・スルピツァ市には合計7つの村 (紛争以前にセルビア人が居住していた地域) に投票所が設けられたことになっているが、UNMIK の調べでは当時セルビア系住民がいた2つの村にしか投票所は確認されなかった。
- ⁵¹ UNMIK Press Release, 6 September 2000, “UN mission rejects Belgrade-organized elections in Kosovo as “farce”より。
- ⁵² UNMIK Press Release, 21 September 2000, “UN mission will “witness” Belgrade elections in Kosovo”より。
- ⁵³ OSCE コソボ代表の Dan Everts は選挙人登録を望んだセルビア系住民が長期にわたって不利益を被ることになると脅迫されたと非難し、UNMIK のクシュネル代表は1000人以上のセルビア系住民が選挙人登録への試みを理由に仲間から嫌がらせを受けたと報告している。”Kosovo Serbs Snub Election Appeal” By Ridvan Berisha, IWPR (BCR No. 185, 13-Oct-00) http://www.iwpr.net/index.pl?archive/bcr/bcr_20001013_6_eng.txt参照。
- ⁵⁴ スケンデライ・スルピツァ市ではいささか事情が異なる。ここで圧倒的勝利をおさめたのはコソボ民主党 (以下 PDK) だ。84.03%の得票率で第二勢力の LDK を僅か 13.43%に抑えた。
- ⁵⁵ “KFOR Security Meeting : 5 January 2001”より。
- ⁵⁶ 2月末にアルバニア系住民が殺害されてから、難民がコソボに流入した。UNMIK Press Release 26 February 2001, “Refugees flee to Kosovo from former Yugoslav Republic of Macedonia”参照。
- ⁵⁷ UNMIK Press Release, 30 January 2001, “Security Council members condemn attacks by Albanian extremists in southern Serbia”参照。